

# 特殊児童の幼児教育



三 木 安 正

一般に幼児期の教育が必要であるのと同じく、特殊なハンディキヤップをもつ幼児にあっても幼児期の教育が必要であることは当然考えられよう。しかし、特殊児童といわれるものたちの場合は、その必要性について、あらためて考慮をめぐらす必要もあると思う。すなわち、その必要性を明らかにすることはその種の幼児教育における特殊性を明らかにすることになると考えられるからである。

現在、特殊教育の分野の中で、特に幼児期からの教育の必要性が強くきけられているのは、聾児の場合である。昨年末に文部大臣にあててなされた中央教育審議会の「特殊教育の充実振興についての答申」にも特に「聾者に対する就学前教育の重要性にかんがみ、聾学校の幼稚部の設置に対する助成を図ること」という一項がある。これは、言語の習得のためには、満六才以後の聾学校入学後ではおそいと考えられてきたからである。このことは単に言語の習得のみにとどまらず、一般に三才前後の幼児が言語の習得によって、思考

の力がぐつと伸びていくように、言語の習得が思考の発達、あるいは知能の発達に関係することがきわめて大きいので、聾児などには出来るだけ早くから教育をさすけなければならないということはいやうぶん理解されよう。

しかしながら、従来の聾教育では、言語を教えこむということに主力をそそいでいたので、幼児教育ということを考える場合も少しでも早くからことばを教えこもうという考えが強く出てくる。これは一面ではよほど注意しなければならぬ問題を含んでいると思う。それは、元来、言語というものは人と人との間の意思伝達のためのものであるから、意思伝達の必要感もないのに単にことばだけを無理に教えこもうとすれば、その練習が困難なものであるだけに、かえってことばを習うことを嫌うようになるおそれがあるからである。ことばをおぼえさせるには、だれかと交渉をもちたいという意欲をもたせることが先決問題であるから、そのためには、彼ら

に遊びの世界を与えてやらなければならない。結果として聾児の教育のためには幼稚園を設ける必要があるという点では一致しても、わたくしは、特に早くから遊びの世界を与えるという点にその意義をもたせたいと思う。

このように考えてくると、聾児ばかりではなく盲児に対しても幼児期からの教育が必要だといわなければならない。ある種の感覚機能訓練とか生活習慣の自立とかは、時期をはずさないことが必要であるし、対人交渉をもたせ、経験を豊かにしていくことは精神発達の上からきわめて大切なことと考えられる。

わたくしは昨年の三月末から七月末にかけて欧米の特殊教育の状況を視察する機会を得たが、カリフォルニア州のスクラメント郊外やベンチュラ郊外では、普通の小学校（幼稚園もふくめて）で盲児や聾児の教育を試みているところを見ることができた。これは、盲学校や聾学校の中での幼児教育よりも一歩すすんでいるといえよう。

そのような学校でのやり方は、対象となる児童をスクールバスであつめてくるが、大体八、九名で、（幼稚園から小学校の六年まで）ひとりの盲または聾教育の教員資格のある先生が基礎的な訓練をし、その上でできるだけ多くの時間普通学級で正常な生徒と一しょに学習をさせる。こうしたやり方は正常児と交渉する機会を多くもたせるといふ点では甚だよいが、残念ながら日本のようなすし詰め

学級での教育ではまねすることはできない。あちらでもこういう教育を試みているところはモデルスクールなのであろうか、ともかく普通学級の児童数が二十人位のものであつて、それだからこそ、そうした個別指導ができるのである。

わたくしが、そうした幼稚園でみたのは、レコードによるリズム遊びのようなときで、ひとりの盲児が、盲児専門の教師にたすけられて、正常児と一しょに両手をひろげてくるくる回転することをけいこしていた時であつた。はじめは、しゃがみこんでいたが、うしろから先生にたすけられて立ちあがり、先生と一しょに二、三回ぐるぐる廻ると、そのあとしばらくのあいだひとり手をひろげてまわっていた。その時、ほかの子どもたちともぶつかりあつていたので、おそろく、みんなも一しょにぐるぐる廻っているのだということをも理解したのではないかと思われる。この行動ができたのは、その日はじめてだとのことで、幼稚園の先生と盲教育の先生と私とは、それぞれ感慨をこめて拍手を送ったのであつた。

心身に故障のある者にしあわせを得させるためには、本人に対して出来るだけのことをしてあげるとともに、周囲のものが、それをやさしく、正しく受けいれてあげることが必要である。その意味で、こうした教育の場が開かれてきたことは、その本人とともに、受け容れる側の方の教育という面からも、誠にこのましいものと思われるのである。

精神薄弱児に対する幼児教育については、七、八年前に、イリノイ大学のカーク教授の下で、多分三年間にわたる教育実験が試みられ、その研究成果が昨年春（三月ごろ）出版されたが、その書名と出版社の名前をしるした紙片を見失ってしまったので、目下問合せ中である。カーク教授にお会いした時、教授はこの本について相当の自信をもっておられたので早く読みたいと思いながら、今日までおかれてしまっている。むろん一般的にいえば早くから教育した方が効果があるということであろうが、個々のケースについての詳細な記述があるようである。

ニューヨークのコロンビア大学の教育学部の特設教育コースでも、いま、やはり精神薄弱児の教育実験をやっているが、その結果は二、三年後に出されるだろうとのことであつた。

自慢話になるが、昭和十三年九月に愛育研究所ができたとき、わたくしはその所員となり、異常児保育研究室を担当したが、研究をするにはその対象がなければならぬと考え、その年の十二月から、ささやかな特殊幼稚園を開いた。文字どおりささやかなもので、はじめのころは一週二回、まもなく三回としたが、子どもは六、七人であつた。これは大平洋戦争が敗色濃くなって、東京もしばしば空襲に見まわれるようになるにいたつて閉鎖されたが、今日愛育養護学校として発展しているものの前身である。それ故に、精神薄弱児の幼児教育の研究としてはカーク教授のに先立つこと十年ばかりであるが、残念ながらその研究の規範や研究能力の点ではカーク教授らのものには及ばなかつた。そのころの研究の一部は愛育研究所紀要第二輯に、「異常児保育の研究」として精神薄弱児の行動と言語の特徴を中心としてまとめたものがあるが、その後のものは戦乱のために、まとめる機を逸してしまつた。

そのころドイツには特殊幼稚園<sup>インジクキョウガール</sup>とか学校幼稚園<sup>シュールキョウガール</sup>というものがあつて、前者は多分異常児の幼稚園、後者は学令に達したが未だ就学にあたえないものを入れるところというものであつたので、ドイツが一番早くからそうした試みをなしたところといえよう。

さて、普通の病氣などでは、「早期発見、早期治療」ということが大切とされる。精神薄弱児の教育に対しても、同じようなことがいえてしかるべきであるが、早期に発見して早期に治療すれば、きつとよくなるというわけにはいかない。もちろん早くから適当な教育をすることがよいことはきまつているが、そうすれば、精神発達の遅滞がとりもどせるとか、進歩を促進できるとかいうわけにはゆかない。つまり「なおる」という考え方が普通の病氣の場合のようにには使えないのである。

精神薄弱ということとはそれ自体が病氣ではなく、何らかの故障の結果としてみられる精神発達の遅れた状態なのである。

遺伝的素因によつて正常な発達がみられなかつたものの、素質は悪くなかつたのであるが妊娠中から出産後数年の間において、外部か

らうけた原因によって大脳の皮質にうけた障害のために、正常児のように働かなくなった精神をもつ子どもたちが精神薄弱児などであるから、早期発見、早期治療あるいは早期教育が必要であるといつても、病気の場合のそれとはちがう。

また、知能障害の重症のものは、お誕生前にでも発見し得るが、障害の程度の軽いものは、小学校にあがるようになってはじめて親が気がつくという場合も多い。ただ幼稚園に通っていれば、親の方では気づかずにいても、先生の方では気がついて、これは就学期がきて、小学校にあげるのは無理なのではないかというように考えられる場合がすくなくない。しかし、そういう場合でも、いわゆる“おくて”で、あとからのびてくるのではないかという期待があったり、非常な甘えっ子であつて、自立性、自主性に乏しいため、知的におくれているように見えたりすることもあつて、なかなか判定はくたしがたい。

そこで、精神薄弱児あるいはその疑いのあるものに對しての幼児教育者の問題としては、

- 1、精神発達が正常であるか遅れているかということ客観的に見分けていく眼を養うこと、
- 2、もし、精神発達のおくれている子どもがいたならば、その子どもの能力に相応した遊びや仕事を与えるようにし、その交友關係に氣をくばること、

3、子どもの精神的発達程度ならびに、その取り扱い方について、その子どもの親に正しい理解をもたせるようにすること、の三つのができるように研鑽をつんでほしいと思う。

さらに精神薄弱児だけの特殊幼稚園がつくられることも望ましいが、こういうものをつくると、幼いころから精神発達がおくれていると親も觀念するような子どもでは、その程度も相當に重症な場合が多いので、将来は、うまくいって小学校の特殊学級に進みうるが、それにも少し重すぎて、精薄施設にお願いしなければならない者たちによって占められる可能性があるという覚悟でかからなければならぬであらう。

一般の幼稚園で、年長・年少に分かれ、且つそれぞれ二組以上あるようなところでは、精神的に活潑な子どもたちと、そうでない子どもたちとを組わけの際に適當に配置するようにした方がよいと思う。幼稚園時代は小学校時代よりも生まれ月による発達の差が一層大きいから、それらとともにらみ合わせて考えるべきである。

一般的にいえば、幼稚園は、ひとりひとりの子どもの発達の度合いをたしかめ、家庭などの影響で発達が伸びなやんでいるものは、これを調整して伸ばしてやり、何らかの故障があつて遅れているのは、それらしく扱うようにといったスクリーニングの役を果すところだという考え方をもう少し強くもつてよいと思う。